

617) 草刈

高崎のバッチャンと田舎に草刈に行くことにした。放って置くとタンポポの種が風に飛ばされて、一面のタンポポ畑になってしまうからだ。ここ数年いい時期に草刈を続けて来たから、ウマゴヤシが増えてきて、いい具合の草原に変わって来た。この調子で刈り続ければ、やがてゴルフ場みたいに綺麗な草原になると考えていたのだ。バッチャンは朝早く起きて、美味しい鮭弁当を作ってくれたし、ジッチャンの健康を考えていつも魔法瓶にドクダミ茶を作ってきてくれる。草刈機や、草刈道具は物置に仕舞ってあるが、もうボロ屋はとっくの昔に処分してしまったから、ちょっとした別荘風に、おしゃれなイスとテーブルがいくつか置いてある。と言ってもどれもこれも中古屋で仕入れてきたものだから、かなりの年物物である。

1 時間ばかり車を運転して現場について、さあ、草刈をはじめるかと思ってポケットに手を入れると、車の鍵が出てきた。本来はこの鍵に物置の鍵がついているのだが、どこをさがしても見つからない。簡単に言えば忘れてきたのである。やむなくバッチャンの鮭弁当を食べて、ドクダミ茶を飲んでタンポポの上で昼寝をして、『ああいい休養になったワイ』と負け惜しみを言いつつ、そそくさと帰ることとなった。帰り際、写真でも撮って帰ろうかと思って、カメラバックを開けてカメラを出すと奥の方に光るものがある。なんと物置の鍵だった。時すでに遅し。もう日暮れが迫っていたのでありました。